

里山の問題（その1）

大串龍一

河北潟湖沼研究所

〒920-0051 石川県金沢市二口町八58

要約：近年，日本の自然環境に関する論議の重要なテーマとなってきた「里山」について，それがどのようなものであり，なぜわが国においてとくに問題とされるのかをいろいろな観点から検討する．まずその成立から歴史の変遷にかんして，現代までの見方をとりまとめた．

キーワード：「里山」のイメージ，小学唱歌，人為的自然，成立年代，「里山」の崩壊

ここ10年来，日本の自然あるいは社会科学の分野において，「里山」という言葉が良く聞かれるようになってきた．特に環境問題のなかで「里山の保全」が大きく言われるようになった．2005年に開催された愛知万博の準備段階から，予定地に含まれる「海上の森」（かいしよの森）の保全をめぐる，当初の計画を大きく変更しなくてはならなくなったことが，話題となったためと思われる．しかしその背景には，1990年頃から里山というものが日本の自然環境の保全に大きな関係をもっているということが，環境保全関係者や生態研究者の間で自覚されるようになってきたことが，このような動きの基盤にあると考えられる．

「里山」というものが自然環境保全運動のなかで大きく取り上げられるなかで，これまでの自然環境の見方にかなり違った傾向がみられるようになってきた．それは，第一にはそれまでの人手の入らない原生自然の保全を重視する立場から，人間活動との関係の深いいわば人間によって変容された自然をも重視する方向へと，視野が広がったことであり，第二には自然環境を保全するためには，人間が介入しないで自然にまかせるという方向から，ある種の自然を保全するためには，適切に計画された方法で人間が介入することが必要であるという方向に変わったことである．

しかし「里山」というものに対する概念や定義あるいはそれを保全する方法論は，近頃になって実態の把握と検討が始まったばかりであり，社会でも学界でも「里山」に対する認識自体がまだ固

まっていない．ここでは「里山」について今までに判ってきた範囲で，ほぼ確かであるといういわば「里山」の常識とでもいべきことをまとめて記述し，それをもとにして「里山」問題に関する，私の意見を述べたい．この文章のなかでは，まだ十分に判っていないことについてもかなり思い切った断定をしている部分もあるが，もちろんこれは今後の調査研究や多くの人たちの論議を通じて変わってゆく可能性を多く含んでいる．

1. 「里山」がなぜ話題となってきたのか

ここ十数年，日本における環境問題の議論のなかで，それまでのブナ林や屋久杉などの原生林に代わって，「里山」という言葉が頻繁に聞かれるようになってきた．いろんな環境保全の議論を聞いていると，里山の保全ということが自然環境保全の中心課題と感ぜられるような流れになってきている．このことは環境教育における「ビオトープ」という言葉の流行と平行して起こってきているように思われる．「里山」にしる「ビオトープ」にしる，これまでの環境問題のなかでの「生態系」とか「生物多様性」とかいった議論がややもすれば観念的になって，具体的なイメージを伴わないのに対して，観念よりもむしろ具体的なイメージあるいは風景が先行していて，概念あるいは定義がまだ充分にはまとまっていないことが特徴といてもよい．

「里山」という言葉は，「奥山」に対応する言葉

として、文献的にわかっている範囲でもすでに江戸時代から使われている。しかし今、環境問題の論議で使われている里山という言葉から、ごく近年まで多くの日本人の心のなかにあったイメージが呼び起こされて、このように急速に社会に広がったのではないかと思われる。

「里山」は日本の環境問題におけるひとつの転機になった。

2. 里山とはどんな場所か

最近では里山と一体となった集落やその周辺の耕地、溜め池なども含めて「里地・里山」と言われることが多いが、この問題を主に取り扱う環境省の定義では、里地里山とは都市と奥山の間に位置して、集落とそれを取り巻く二次林を主体として、そこに混在する農地、溜め池、草地などで構成される地域を指している。これは日本の国土の約4割を占めており、日本の自然環境の最も大きい部分となっている。これは原生林と違って、人間の生産・生活活動によって造られ維持されてきた環境である。

3. 日本人のイメージする「里山」

里山という言葉を知って、日本の普通の人々が思い浮かべるイメージは、「小さなあまり深くない谷間あるいは盆地とその中を流れる小川、岡の麓か中腹には小さな集落があって、集落の上には神社やお寺がある。山はあまり茂り過ぎない森か林と、明るくススキなどの草原で、遠くの高い山は深い森林に覆われた景色」である。広い意味ではこの村と山全体を里山の風景として、具体的には村の上にある浅い森や茅場などの草地に覆われている丘陵を指して「里山」という。最近ではこの村落とその周辺の田畑などを「里地」、樹林や草地に覆われている丘陵を「里山」という分け方が一般的になってきた。

このような日本人の思い浮かべる里山の原型となったのは、主として明治時代から昭和中期までの、小学校唱歌に歌われた子供の歌であろう。

小学唱歌といえば、いまもよく歌われる「故

郷」「春が来た」「春の小川」「朧月夜」「紅葉」などの作詞者、高野辰之の出身地は大都市のある広い平野ではなく山地や小さな農耕地の入れ混じった長野県である。

昭和初期から中期に生まれた世代の子供時代に、小学校の音楽教育の基本（必修ではないが）となった「新訂尋常小学唱歌」（1932 - 1941）の1 - 6年生の歌（各学年に27歌曲ずつ）では、次のような農山村の歌が入っているが、そのほとんどが「里山」のある地域、今の行政区分でいう中山間地域である。

この時代は日本が戦争に入ってゆく時期だが、戦争にかんする歌は案外に少ない。参考までに〔 〕内に戦争・軍隊の歌の数を挙げる。戦争の歌といっても「扇的」や「青葉の笛」など昔の合戦の歌が多い。

- 1年生 夕立、一番星みつけた、〔1〕
- 2年生 雲雀、田植、こだま、案山子、〔1〕
- 3年生 春が来た、摘草、茶摘、蛭、燕、村祭、
取入れ、麦まき、私のうち、〔3〕
- 4年生 春の小川、いなかの四季、蚕、水車、た
けがり、村の鍛冶屋、〔4〕
- 5年生 納涼、〔4〕
- 6年生 朧月夜、我等の村、風、故郷、秋、〔3〕

これは海村の歌が全部で3（漁船、海、我は海の子）であるのと、大きく違っている。都会の歌とはっきり判るのは1つ（こいのぼり）しかない。

小学校の歌の教科書には載っていないが当時（1935 - 60）から一般に広く歌われた子供向け唱歌でも、次に若干の有名なものを示したように、里山あるいはそれに近い農村を舞台とした歌は多い。

〔 〕内は作詞者、数字は発表年。

- 夏は来ぬ（佐々木信綱）1896、七つの子（野口雨情）1920、赤とんぼ（三木露風）1921、どこかで春が（百田宗治）1923、夕焼小焼（中村雨紅）1923、お山の杉の子（吉田テフ子）1940、里の秋（斉藤信夫）1945、かあさんの歌（窪田聡）1961、

これを見ると里山を背景とした農山村の暮らし

が、いかに日本の一般人の心情に浸透していたかが判る。同じ農村でも広い平野部の農村の歌とはっきりわかるものはほとんどない。里山という言葉が素直に日本の社会に浸透したのも、環境問題に対する関心の高まりに加えて、こうした近代日本の一般人たちの心にしみこんでいたふるさとの村のイメージが基盤にあったためではなからうか。

4. 人によって改変された自然の重要性

里山は、近年まで自然保護活動のなかで重要視されてきた、まったく人手の入らない原生林とは明らかにちがっている。「里山」で問題になる場所は、その地域の住民によって開かれ、田畑だけでなく山の中まで人が立ち入って利用している自然である。これまでの自然環境保全にかんする論議のなかでは、しばしば自然環境は人間が手をつけることによって劣化し、環境保全機能が衰えるといわれてきた。1970年代になって水田の環境保全効果が取り上げられるようになったが、これもどちらかといえば、ダム反対のための一種の戦術のように思われていた。林業のように動植物を使った事業でも、昭和30 - 40年代の杉林を主とした拡大造林が、自然破壊として批判されてきた。

里山の環境保全における重要性の指摘は、保全の対象を人手が入って変容された自然に向けるという点で、これまでの環境保全活動の大きな転換点であったといえる。そればかりでなく、常に人が干渉していないと消滅してしまうタイプの自然を保全の対象とする点で、自然保護活動の新しい方向を指し示したともいえるよう。

いま問題となっている里山とは、人間がその生活圏の一部として関与している、いわば自然・人間共生系とでもいうべきものである。その人間の関与のあり方は、地域の住民の生活様式と深く結びついている。

里山的な自然そのものは、必ずしも日本特有のものではない。湿润アジアで歴史の長い地域には、このような森林と集落を一体とした自然・人間の共生系は広く存在する。私もインドネシアに

おける里山的環境について記述したこともある。しかし日本の里山は日本の地史と文化史にもとづいた独特のものであると感じることが多い。

5. 日本の里山

里山といえば包括的な概念としては、野生の自然を生活圏の一部に取り込んだ人間の集落とその周辺環境、あるいはそのうちの丘陵と森林の部分をさす。現在、日本の環境論でひろく取り上げられている「里山」は、こうした自然と人間の共生系一般の自然ではなくて、近世 現代日本における農山村（国土交通省の区分で言う中山間地帯）の村落のまわりにある丘陵上の雑木林（薪炭林）、ついで水田農業の水源として造られた溜め池を主な対象としている。神話時代から近代まで日本の歴史に大きな役割を果たしてきた海浜の松林なども、同じく人と自然の共生系であるが、農業よりも鉱工業と深く結びついていて、今のところ環境問題の中ではあまり大きくは取り上げられてはいなかった。

「里山」といえば、「谷津田」が切り離せない。主に低山帯の小さな谷間の底の小川沿いに、不整形の水田を並べた谷津田（この呼び方は東部日本のもので、西日本には別の呼び方があったと思われる）は、水田稲作が日本に入ってきてから長い間、続いてきた稲作の方式である。栽培植物としての稲ははじめ陸稲として縄文時代から部分的に作られてきたが、約6千年前に東アジアの温帯、揚子江下流域で始まった水田耕作が、5 - 6千年前に日本列島に入ってきた。約1万年前に終わった最終氷河期とともに進んだ気候の温暖化がこれを促進したものと考えられる。その初期には谷間の湧き水の近くに出来た小規模な湿地を利用して栽培されたものであろう。これが近代まで残った谷津田の原型である。この小規模な水田が、シコクピエや粟などの畑とともに、5千年近い日本列島の人々の生活を支えた農業であった。これによって縄文時代の生活様式を大きく変えることなしに、日本列島の農山村の生活が維持されてきた。

里山生態系,具体的には山がかつた農村の薪炭林・山畑や草刈り場と谷津田の組み合わせが,近世の日本農村を支えてきた。これは近代(地域によって異なるが昭和30-40年代)まで,日本の大多数の家庭の燃料が薪と木炭であったことよっている。当時,都市ガスはあったが,都市の住民の大半は暖房も炊事も薪と木炭によっていた。石炭と練炭が一部に使われた。電気はほとんどが照明だけに使われた。電熱器が炊事や暖房に広く使われるようになったのは,敗戦直後の極度に薪炭が欠乏した時期からである。

6. 日本の「里山」はいつ頃できたものか

近年,新しい環境考古学の成果を利用しながら,日本の国土環境の成立を考えることができるようになってきた。その結果,やや割り切っていえば,縄文時代の終わり頃までに,この土地で数万年あるいはそれ以上生活してきた住民が,その当時の自然環境を利用して作り上げてきた生活様式を維持するために,氷河期の末期に存在した森林を中心とする自然環境を人工的に保存してきたのが,今の里山の起源であるといえよう。つまり当時の気候条件下で成立した森林に依存して完成した人々の生活様式を維持しようとする人間の努力が,今の「里山」として残っているのである。

繰り返して言えば現在の里山の由来,それは約1万年前までの後期石器時代から縄文時代にかけて日本列島に定住した人達が造り上げた生活様式の上に,約5千年前からの初期水田耕作の普及によって広がった生活様式が複合して生まれたものである。その里山の森がごく近年までのように薪炭林として定着したのは,木炭の製造技術が完成した中世後期であろう。

具体的にいえば,中部日本の低山地域においては,里山の原型は自然植生として後期石器時代に成立し,長いウルム氷期(数万年)の間に,住民によってその自然環境と共存する生活技術が造り上げられた。そうして縄文時代(約一万年前)には,現在に近い里山の利用形式とそれを支える管理技術の基礎が出来上がった。

日本列島では,6千年前の気候温暖期を経て,

暖地照葉樹林が次第に北上したが,すでに住民生活と切り離せないものとなっていた落葉広葉樹林は,温暖化とともに入ってきた初期の水田耕作(棚田という形で完成した)と結びついて維持され,その状態がごく近年まで継続されてきた。

日本列島に住み着いた人達の土地利用は丘陵・高原に始まり,ついで小河谷・小盆地の山裾が開拓された。この時期から農耕の発達と平行して,大河・湖沼・潟湖・沿海の水面を利用した水産・交易が発展した。縄文時代の海上交通の発展は,伊豆諸島の黒曜石のような,産地の特定される石器の原材料の本土における広い分布からも明らかである。この内陸の山地・谷間の開発と,沿海・河川湖沼の水上交通の発展は,日本列島の先史時代から歴史時代にかけて進行し数千年にわたって継続したが,とくに2・3千年前の初期工業(製鉄・窯業)でさらに大きく展開する。これが自然環境とくに森林に与えた影響は大きいものと推測される。日本列島と欧米とくに農業の歴史が長い中近東やヨーロッパとの基本的な違いは,日本列島の大半の地域においては家畜の放牧による土地利用が行われなかったことである。この家畜の放牧による土地利用がほとんど無かったことが,温暖多雨の気候とあいまって,古代から中世にかけての中近東やヨーロッパのような土地の荒廃を防いでいたと思われる。

歴史時代に入ってから次第に増加していた人口と耕地面積が急速に伸びたのは,中世から近世に移る1550年から1650年にわたるいわゆる日本国土(北海道を除く)の大開墾期である。この時代は日本の政治史上では室町時代から戦国時代をさんで江戸時代に移る戦乱の時期とされているが,戦国大名などによる大きい労働力の動員と,築城や農業生産基盤の造成のための土木技術が進んで,大河の氾濫源や大湖沼・海岸の広い湿原が干拓されて水田が開かれた。歴史上,耕地面積の増加が人口増加率を上回った珍しい時代である。この開墾・治水事業が可能となったのは,山地森林(奥山)の保全とともに,縄文時代から出来上がっていた里山管理技術を活かした低山帯の土壤浸食の防止と河流の安定によるものであらうと考えられる。

これをまとめれば、

1万年前 里山生態系の成立とそれを利用する
技術の完成による住民生活の安定

5千年前 水稻栽培の導入と里山 谷津田生態
系の成立

4百年前 大河下流域と海岸湿地の干拓による
平野水田地帯の成立

となるであろう。

こうして現在の日本列島の景観の基盤が出来上がった。

これが次に大きく変わったのは、1970年代からの工業都市化とその農山村地帯への影響の波及である。

7. 「里山」生活の解体と里山生態系の崩壊

日本列島における里山生態系の原型が出来上がった約1万年前から、氷河の後退によって気候は次第に温暖化していった。自然の遷移にまかせれば中部日本の里山を造っている落葉広葉樹林は北あるいは山地帯に退いて、常緑照葉樹林に入れ替わってゆくものと考えられる。そうすれば当時の住民の生活がかかっているタイプの森林の消滅によって、住民は北に後退した落葉樹林を追って移動するか、あるいは進出してきた常緑広葉樹林（照葉樹林）で生活するための新しい生活様式と技術を開発しなくてはならない。住民はすでに獲得していた里山の管理技術を用いて、温暖化した土地において落葉広葉樹林を維持する努力を続けたのであろう。この時期にすでに習得していたコナラなどの萌芽再生技術が、この落葉広葉樹林を維持するために有効であったと思われる。

気候の変化に対応してそれまでの里山を維持するという保守的な面とともに、水田耕作を導入してそれまでの生活と組み合わせる新しい生活様式がこの地域に作り出された。水田は少ない労力で開発できる小さな谷間や小湿地から始まった。はじめは土砂の流入や水位の変動などで不安定なものであったが、やがてそれぞれの地域の特性に応じた水管理の技術が考案されて、安定した生産を保証するものとなった。これが現在でも谷津田という形で残っている、小さくて地形にあわせた小

水田である。この里山 谷津田生態系の完成によって、日本の低山帯は高い人口負担力を保って現在に至った。

この里山生態系とそれに合わせた農山村の生活が変わったのは、近世 現代の2つの燃料革命である。

日本列島においては、住民の生活と産業を支える燃料は、縄文時代から近代までは薪炭であり、ごく一部に油脂があった。すべていわゆるバイオマス・エネルギーである。

江戸時代後期になると、人口増加による生活用燃料（炊事・暖房・照明）の消費と、工業生産特に製鉄のための燃料需要が増大して、森林の過剰伐採あるいは落枝・落葉の過剰採取が進行し、明治中期には山地林や海岸林の消滅の危機が訪れた。本多静六による「赤松亡国論」が唱えられたのはこの時期である。

この大規模な森林破壊を救ったのが石炭である。明治初期から急速に開発された北九州・常磐を中心とする炭坑によって、日本は当時のアジア最大の石炭生産国になった。それまでのタタラ製鉄の燃料であったマツ林から、石炭さらにコークスを使うベッセマー炉などによる製鉄への転換によって、マツ林を主体とする日本の低地・海岸林は伐採や落葉・落枝採取が少なくなって再生しはじめた。しかし炭坑で使う坑木としてのマツ材の需要が増えたために、マツ林の管理は続けられ、広いマツ林は維持された。石炭あるいはその加工品である練炭は、薪炭に代わって工業、運輸（鉄道・船舶）、家庭用の燃料にもひろく用いられて、日本の森林の維持に大きく貢献した。

明治時代の鉱工業燃料のマツから石炭への転換が第一次燃料革命とすれば、森林にかかわる第二の燃料革命は昭和30年代から始まった生活燃料の薪炭から都市ガスあるいはプロパンガスへの転換である。この変化はそれまでの薪炭の供給源であった里山林の価値を急速に低下させた。需要がほとんど無くなったために薪炭の生産をやめた里山林は見捨てられた。住民によって丁寧に管理されてきた萌芽再生林は放置され、里山は自然の遷移に任せられ、その土地の原生植生に戻りつつある。それとともに氷河期以来、人のはたらきで維

持されてきた里山という環境において保存されてきた動植物も、すみ場所を失って消滅しはじめている。ギフチョウはその代表的な例である。

この第二の燃料革命とほぼ平行して進んだ水力発電と、火力発電のエネルギー源の石炭から石油・原子力への転換によって生じた巨大な量の電力供給ならびに、内陸運輸の中心の鉄道から自動

車への転換（それはエネルギー源の石炭から石油、電力への転換でもある）によって生じた交通体系の変化は、時期を同じくして世界的に広がった情報革命とともに、日本の農山村社会に大きな変動をもたらした。（続く）

（文献はこの連載の最後にまとめる）